

第 18 回 静岡小児感染症研究会 抄録集

テーマ：「子宮頸がんと HPV ワクチン」

当番世話人：大河原 一郎（静岡赤十字病院）

【協賛】 キリンホールディングス株式会社 MSD 株式会社

一般演題 ①

治療選択に難渋した先天梅毒リスク児の一例
～治療しないという選択の難しさ～

静岡市立静岡病院 小児科
山中 雄城

若年層での梅毒感染が 2013 年以降に急増し、それに伴い先天梅毒の報告数も増加している。今回妊娠 8 週に顔面神経麻痺を発症し、神経梅毒を伴う第 2 期梅毒と診断され、妊娠 9 週および 18 週からそれぞれ 2 週間、計 4 週間のペニシリン投与が行われた母が当院で分娩し、当科で出生児の管理を行った。母には難聴の後遺症を残したもののその後の治療奏功が確認されており、妊娠前まで STS-RPR 検査と TPLA 検査はいずれも一貫して低下傾向だった。また胎児に形態的・機能的異常は特に確認されず、在胎 39 週 0 日で出生した際にも、AGA、Apgar Score 9/9 で、特記すべき異常は見られなかった。通常、妊娠 16～20 週以前に母体梅毒の治療が開始できれば胎内感染防御が期待できるとされる一方で、出生後 2 年以上経過して初めて症状が出現する晩期先天梅毒もあることから、出生児の治療実施の判断に苦慮した。本発表では梅毒非トレポネーマテスト陽性母体から出生した児の一般的な管理方法に加えて、本症例で判断に迷ったポイントや最終的に選択した管理方針について提示するが、本症例が研究会参加者のご議論のきっかけになれば幸いである。

一般演題 ②

急性弛緩性麻痺の学童例

浜松医科大学 小児科学講座
磯部 裕介

気道感染後に突然の左上肢の脱力で発症した急性弛緩性麻痺の 9 歳女児例を経験した。X-7 日に咳嗽、X-6 日に発熱を認め、X-5 日には解熱した。X-2 日に左上肢の脱力が出現、X 日に左上肢の拳上困難まで症状が進行したため当科に精査入院した。左上肢の徒手筋力テストは 3/5 に低下しており、筋力低下は左上肢のみに限定していた。髄液検査で細胞数上昇、頭部・脊髄造影 MRI では明らかな異常所見は認めなかった。鼻咽頭スワブを用いた FilmArray 呼吸器パネル 2.1 検査では Rhino/Enterovirus が検出された。感染を契機とした急性弛緩性脊髄炎と診断し IVIG による治療を開始した。その後当研究室で精査し鼻咽頭から検出されたウイルスは Enterovirus D68 と判明した。IVIG を 5 日間×2 クール行ったが入院後 3 週間経過した現在も左上肢不全麻痺は残存している。急性弛緩性麻痺の鑑別疾患や現在の本邦におけるサーベイランスについて文献的考察を加えて報告する。

一般演題 ③

7 波 COVID-19 当院入院事例の臨床像とインパクト

静岡県立こども病院 後期研修医
山田 隼也

当院における COVID-19 の入院症例の臨床像や基礎疾患について後方視的に調査した。なお、静岡市では軽症の小児患者は自宅療養を原則とし、隔離や観察目的の入院はしないこととした。調査期間は 2020 年 7 月 28 日～2022 年 9 月 30 日で、入院症例は 62 症例。年齢の中央値は 4 歳 8 ヶ月で男女比は 1.8 : 1、入院期間は中央値 4 日であった。32 症例が基礎疾患により当院のかかりつけであった。基礎疾患のある患者においては呼吸障害の合併は 12.5%で、生来健康な患者で呼吸障害により入院した症例は新生児例の 1 例のみであった。また、基礎疾患のない入院の 56.7%は痙攣によるもので、年長児に多かった。小児の COVID-19 は、重症例は稀である。

話題提供

これだけは知っておきたい：HPV ワクチンのあれこれ

MSD 製薬 メディカル部門 ワクチン・感染症領域
エグゼクティブディレクター・内科専門医
佐々木 津

HPV ワクチンはヒトパピローマウィルス (HPV) の感染を予防するワクチンである。

HPV 関連疾患としては代表的なものとして子宮頸がんが知られているが、その他にも肛門がん、外陰がん、膣がん、頭頸部がん、尖圭コンジローマなども HPV の感染によって起こることが知られている。このワクチンは 2013 年に予防接種法に定める定期接種として全額公費助成で接種可能となったが、ワクチン接種後に報告された「多様な症状」に対する懸念から定期接種ではあるが積極的な勧奨を見合わせるという措置がとられて接種率は一気に低迷した。2022 年 4 月より勧奨が再開されて接種率は回復しつつあるが、まだ接種を躊躇する女兒・保護者、および医療関係者は相当数いるのが現状である。しかし、日本では子宮頸がんは増加傾向にあり、年間の患者発生数は約 10000 人、死者は 3000 人弱と疾病負担は高く、接種率が低迷したままの状態を看過することは公衆衛生上の危機といえる。にもかかわらず接種をためらう人が多いのは、接種後の副反応を懸念しているためと考えられる。2018 年に、世界保健機構 (WHO) が「予防接種ストレス関連反応 immunization-stress related responses: ISRR」という概念を提唱したが、HPV ワクチン接種後にみられる種々の症状は ISRR として説明できること、またその予防法や対処法も明らかになっており、それについて概説したい。

【略 歴】

1990 旭川医科大学医学部医学科 卒業、医籍登録
1992 横浜市立大学医学部 第一内科 入局
1998 エモリー大学医学部 ワクチン研究センター 博士研究員
2001 国立感染症研究所 生体防御部研究室 室長
2005 横浜市立大学医学部 微生物学 准教授
その後製薬業界に入り、2017 年より現職

教育講演

なぜ病理検査室も HPV ワクチンを応援するのか？

静岡市立静岡病院 病理診断科

江河 勇樹

我々病理検査室は、HPV ワクチンと全く接点がない。しかし子宮頸がんのもう一つの予防方法である「細胞診」によるがん検診は、病理検査室の主要な業務の一つであり、組織診による診断とともに頸がんに関わっている。検診で発見された病変が思いもよらぬ浸潤癌であった場合など、診断をつけるのがとても残念である。したがってワクチン（と検診）により頸がんが減る方が減るのはもちろん、煩わしさを抱える患者さんが減ることも、我々病理検査室が深く望むところである。一方で頸がんはウイルス感染と発がんの機序が分子腫瘍学的に詳細に検討されている興味深いがんであり、それらを目で見て形態として捉えることの出来るのは病理学の魅力ともいえる。これらを少しだけ紹介させていただく。

【略歴】

2000 静岡県立静岡高校 卒業
2006 大分大学医学部 卒業
2006 静岡市立静岡病院 初期臨床研修医
2008 聖隷浜松病院 病理診断科 専攻医
2013 静岡市立静岡病院 病理診断科

■ 所属学会 ■

日本病理学会（専門医）
日本臨床細胞学会（専門医）

特別講演

今、改めて知っておきたい HPV ワクチン ～積極的勧奨再開後の現在地～

みんなパピ！ みんなで知ろう HPV プロジェクト 代表理事
稲葉 可奈子

2022 年 4 月に本格的に HPV ワクチンの積極的勧奨が再開し、うちそびれた世代へのキャッチアップ接種も始まり、少しずつ接種者は増えてきていますが、周知はまだまだ行き届いていません。子宮頸がんは、HPV ワクチンと子宮頸がん検診によりかからずにすむがんですが、日本では罹患者が減る気配もなく、この状況を見過ごすわけにはいきません。

2013 年の副反応疑い報道からの長年にわたる積極的勧奨差控えを繰り返さないために、そして、多くの接種対象者が理解して接種していただくために、医療従事者にできることや気をつけるべきポイントについて共有したいと思います。来年度から定期接種の対象となる 9 価 HPV ワクチンや、定期接種化が議論されている男性接種についても解説いたします。

HPV ワクチンを「なんとなく」敬遠している人はまだ多いです。対象者すべての方が「ちゃんと」知って接種を検討できるようになるためには、先生方のご協力が必要です。ぜひこの機会に HPV ワクチンについて一緒にアップデートできたら幸いです。

【略 歴】

2008	京都大学医学部 卒業
2008-2010	京都大学医学部附属病院 初期研修医
2010-2011	東京大学医学部附属病院
2011-2012	三井記念病院
2016	東京大学大学院 博士課程 修了
2015-	関東中央病院 産婦人科 医長
2020	一般社団法人 HPV についての情報を広く発信する会 (みんなパピ！ みんなで知ろう HPV プロジェクト) 設立